

## 鹿島市総合教育戦略会議（第15回） 議事録（概要版）

1 開催日時 平成29年5月1日（月）14時57分から16時50分まで

2 開催場所 鹿島市役所 3階 庁議室

### 3 出席者等

- ・法定構成員 樋口市長、江島教育委員会教育長、田中教育委員会委員、中島教育委員会委員、田代教育委員会委員
- ・市長部局 有森総務部長、大代総務課長、江口人権・同和対策課長、有森市民部長、染川福祉課長、事務局（総務課職員 堀）
- ・教育委員会部局 寺山教育次長兼教育総務課長、岡指導主事、山崎生涯学習課長
- ・外部関係 なし
- ・傍聴 なし

### 4 協議または調整した事項（確認事項含む。）

- (1) 第14回鹿島市総合教育戦略会議（H29.1.6）の議事録について
  - ・議事録素案の内容を確認
- (2) 教職員の多忙化の解消に向けた対応策について
  - 5 出席者の発言のとおり
- (3) 家庭のしつけについて
  - 5 出席者の発言のとおり
- (4) 教育委員の活動について
  - 5 出席者の発言のとおり

### 5 出席者の発言

#### (1) 概要

司会：有森総務部長

#### 1 開会（有森総務部長）

- ・出席者の自己紹介

#### 2 市長あいさつ

樋口市長 改めましてこんにちは。新年度に改めて、職員の紹介もあったようにリフレッシュした感じで、色んな課題について議論をしていきたいと思います。平成29年はどんな年だろうかと、私の見方で言いますと、おそらく子どもと女性がいろんな意味で議論される年になるのではと思います。一方で、新年度に入った

ら急に、一触即発、第三次世界大戦か、という雰囲気というのがありました。過去の歴史を振り返ってみますと、衝突は何かの手違いであったり、何かの行き違いで、あっという間に始まってなかなか収まらないというのを我々は歴史的に感じておりますし、それから、国内的にも、4月解散説、6月解散説、7月解散説なんていうのが随分飛び交っていたりと、どうも周辺落ち着かないですが、私たちのまちは私たちのまちでやるべきことをやらないといけない。その中で申し上げたのが、子どもと女性、ということになるのではないかと考えております。子どものほうは単なる教育ということだけではなくて、福祉と一緒にした子育てという意味で、いろんな新しい対策が始まっていくということでございますので、教育委員会、あるいは教育委員会の事務局の部分と福祉部門としっかり連携をとってやっていただかなければならない。それから、女性は、鹿島は女性を大事にするまち応援しているまちだと思います。祐徳院の神様、おしまさん、先日は祐徳ロードで走った方がロンドンマラソンで金メダルを取られたり。鹿島の女性は今後も頑張ってもらえるはずだと。そういうことを含めて、これからの鹿島いろんな課題ありますけども、子どもと女性が中心になるんじゃないかなという思いをしておりますので、ご紹介して冒頭のご挨拶とします。よろしく申し上げます。

### 3 確認事項

第14回鹿島市総合教育戦略会議（H29.1.6）の議事録について  
議事録（素案）の内容確認

### 4 協議事項

#### (1) 教職員の多忙化の解消に向けた対応策について

（大代総務課長 資料1 新聞記事「過重な仕事、教員悲鳴」など、資料2 小中学校に依頼している業務等調査 について説明）

前回第14回の協議の中で教職員の業務量の軽減策について、ということで議論をしていただきました。その中で、鹿島市としてできることは、鹿島市から学校等への委託事業の削減等を行うとか、それから国縣市からの調査・報告等の簡素化や削減について国県へ要望する。それから、新たに事務職員または生徒指導など教員とは別箇に専属的な職員の配置を国県へ要望するというようなものをまとめてお話をしたと思います。まずは、先週金曜日の新聞記事、資料1について説明します。過重な仕事、教員悲鳴、ということで中学の6割が過労死ライン超えという記事が載っております。我々がずっと前年度から協議していた教職員の多

忙化の実態が、全国的にもそういったことがあっているような状況が伺えます。今回の調査では、中学校の教諭が一日11時間以上働いている実態が明らかになりました。それでこの勤務時間の過労死ラインというのが、1ヶ月あたり100時間または過去の2ヶ月から6ヶ月の月平均の残業時間80時間、これを超えたら過労死ラインというそうです。教職員に当てはめると小学校の17%と中学校の41%が100時間。それから小学校の34%と中学校の58%が80時間の基準以上を超えているというような実態です。で、増えた業務とは、安全対策調査への回答、学習指導要領の改訂で増えた授業時間への対応、クラブ活動、生徒や親御さんとのトラブル対応などにより増えているそうです。これについて、文科省でも教職員の確保、仕事内容の見直しを検討しているということです。そういった方向になっていることは間違ありません。この勤務時間の増加の背景には、教員は残業代が支払われていないという点で、基本給の4%を全員に支給する教職調整額によって何時間超勤してもこれ以上増えないということで、超過勤務時間の実態が反映されていないという点にあると思っております。鹿島市において、教職員の多忙化を軽減するために、市の各課がどういったことを学校に依頼してきたかというのが、資料2です。縦の表は、各部で学校に依頼している内容です。こう見てみますと、例えば1ページでいけば、総務課のほうでも交通安全ファミリー作文コンクールというのが佐賀県から依頼があって、それを各学校に夏休みの前に作文を依頼しているものです。ほとんど学校へ依頼するのは、生徒さんにポスターとか作文の依頼をお願いするものとか、ラムサールの事業とかへの参加の案内です。そういった参加依頼、募集依頼が主なもので、これが教職員に果たして負担になっているかどうかですが、依頼が多くなれば、それは負担になるんじゃないかと思えます。一番多いのが教育委員会からの照会・回答で、これは、教育委員会から各学校現場へ発信をしている文書の一覧であります。簡単なものから、結構時間がかかるものもあるようです。ほぼ毎月20件から30件、ほぼ毎日照会・依頼があります。この中には、学校の先生方の手を煩わせないでも済むようなものがあるんじゃないかと思えます。もう少し精査すれば、軽減ができるものも見えてくるのではないかと思います。軽減が図れるものは図っていただければ、という風に考えておりますので、軽減策についてのご意見を申し上げます。

(事務等の軽減策について)

- ・資料2は全ての依頼をベタッと平面的に並べてある。止められるもの、止められないものなどのある程度の分類をしてから検討しないといけない。
- ・過労死ラインというような言葉も出ている、減らすためには、要不要の査定行為が必要。

- ・必ずしも先生に依頼しなくても事務長に依頼するだけでも良いものもあるのではないか。
- ・昨年まで学校現場にいたが、ポスター募集とかはあまり大きな負担ではない。また、事務職員でするのは無理。大体教頭が振り分けて、各先生も慣れているので、大した仕事ではない。今後どんどん数が増えたら大変だが。
- ・県から来る、文科省から下りてきた照会や調査などは、削りようがないのかなと考えている。それぞれの課で似たような別の調査がきたりすることもある。
- ・国県から予算をもらって実施している事業などは、報告書が必要だが、毎年の業務なので、そこまで大変ではないが、軽減できれば助かる。
- ・ポスターとか作文とか、出すなら早く出してもらえばそう大変ではない。直前じゃなくて。また、コンクールの募集要項を生徒分の紙が刷ってあればいいと思う。
- ・資料2に、ABCとか○△×とかの査定をしてはどうか。
- ・どうも真っ先に人を増やせという話になるが、それは次の話。実体を整理して、削れないからどうしても人で手当てするというのならわかるけど、論理が逆。本来は、仕事を削って削ったけどもどうしてもできないという説明をしないといけない。だから、仕事の振り分けをして、県に言うなら県に言う、文部省に言うなら文部省に言う、と分類していくこと。よく事務局で話し合うこと。そして誰と誰が査定をしていくかを決めていくこと。
- ・業務の中身については、指導主事しか分からないところがある。ランク付けするとしても細かな理由をつけて、というのは難しい。そこまで詳しくなくて、A、B、Cのランクわけぐらいならできる。
- ・いろんな補助事業の、報告書の問題が出ていたが、報告書もA4版1枚でいいです、とかの制限をかけることができれば、楽になる。

(部活動について)

- ・土日が部活動でなくなるが、好きでやればそう負担にはならない。一方、得意ではない競技の顧問をやらされると負担になる先生も多い。
- ・部活動での土日勤務について、超過勤務手当ではないが、4号業務手当がつく。1日4時間以上勤務すると3千円。運動部・文化部・競技等も関係なく一律。
- ・部活動は、大きな教育活動の一つと考えている。例えば全部しない、部外指導者にしてしまうと、生徒指導面では少し引っかかってくる。この藤津鹿島地区が生徒指導面でそこまで他所の地区と比べて荒れていないのは、部活動で先生方が頑張っているからといえる。
- ・市内は、小さな小中学校ばかりだが、県で優勝する部活動を持っている学校がたくさんある。他の大きな地区に比べたら頑張っている地区。それが生徒指導に結

びついてきているところが大いにある。

- ・ただ、部活動に休みの日を設けるとするのは必要だと思う。なかなか難しいが。
- ・現場の先生と、仕組みを考える人が一緒に議論をすることが大切。
- ・今後部活動については、文科省も対策を組んでくると思う。部外指導者、外部指導者をきちんと中に取り込んで、指導者として認定しようという動きがある。
- ・中学校部活動の顧問の先生は2人体制をとっている。この2人体制にあと1人外部指導者が加わったら、先生2人は楽にはなり、先生が交代で出てくるなどすれば、生徒指導の面も機能する。
- ・極端に言うと、部活動を教育課程から外して、社会体育にしていれば先生方はかなり楽になるはず。先生であってもやりたい、やってもいいという人は、外部指導者と同じような資格で始動すればいいというような考えもある。小学校の場合はこのような形で、先生がクラブの指導をしているまれなケースもある。
- ・中学校の場合は、教育課程の一環に入っており、勤務時間。必ず中学校の教員が付かないといけない。指導もそのなかでやる。部活が今加熱しているので、ちょっと大変だと言う声があるが、中学校は教員が指導することが前提。
- ・今現在も移行期間という感じで、外部指導者は入れてもらってはいる。まだそう多くは無いし、手当でも少ない。
- ・部活が加熱状況にあるのがまた問題。週に1日は絶対休みましようと言っているけど、試合が近まってくると、やっぱり土日にも練習をしよう、休まずやろうとなる。案外、保護者や私たちも含めて周りは結果を求めるところがある。今度は優勝を、というような。
- ・近い将来佐賀国体が開催される。部活の加熱というのは、そういった将来の大会とも関連をする。
- ・教員であっても、管理職になるまでは、休憩の時間があるとかいうことを意識したことはない先生が多いのではないか。部活動で土日に出て行くことも当たり前だと思ってやってきた。

(その他)

- ・学校生活支援員を配置してもらっているが、特別支援学級、不登校の対応、発達障がい児の対応もしてもらっているし、他の仕事もしていただくこともある。そういった人員を増やしていただければ、かなり先生方の負担は減ると思う。
- ・発達障がい児への対応として、支援員に補助的に付いてもらっている。主担当として授業をする教員がいるが、一人では行き渡らないから、補佐的な仕事をしてもらっている。今先生がこう言っているよとか、これをしなければいけないよ、とか。

- ・昔は、学校に行ったら、静かに机に着いて、先生の言うことを聞く、というので育ってきた世代と、何か自分の好きなことをやっていいよ、というように育ってきた世代というのは、やはり、しつけという意味で違うのではないかと思う。
- ・支援員を増やせばいいと、人的な配置をして対処をしても原因の部分に対処しなければ、先生の人数ばかり増やして、根本的には解決にはならない。
- ・今度、小学校で1コマ授業が増える。中学年、高学年が。どうやってその1時間を生み出そうかと苦慮している。
- ・昔と比べると、学校の守備範囲が広がって、深くなってという感じがする。結局なにかしてなかったら、学校の落ち度になる。なぜしてなかったと。
- ・守備範囲が広がっている。この間ピロリ菌の胃がん対策推進事業に御協力くださいとか、DV総合対策センター事業へのご協力をお願いとか。こういうのは、以前は学校が関わることはなかったんじゃないか。
- ・確かに学校の児童生徒に周知したり指導したほうがものすごく効果があるのは分かるけど、それがなんか段々、学校本来以上に広がってないかな、という印象を持っている。
- ・学校教育を半分に分けたらいいような気もする。先生がやるやつと、学校でやるけれども先生じゃない人がやったほうがいいものがあるのかもしれない。
- ・外部の人に入ってもらって、手伝ってもらってという方向性は非常に大事。
- ・鹿島市として、こういう方策であれば、多少とも解決策にはならないかもしれないけど、現状より良くなる、という案を並べないといけない。
- ・例えば市長と現場の先生たちが集まって、生の声を聞くという機会が年に1回ぐらいあってもいいのかなと思う。年々仕事量は増えているので、今現在はどうかという話をしてもらう機会があってもいい。
- ・そのような場が全然無かった。それが教育委員会の問題だと言われている。何をされているか分からない。市長だけじゃなくて、外部に分かりづらかった。
- ・まず校長先生たちをここに入れて一緒に話し合いができればいいと思う。
- ・校長会としても、是非そういう機会をつくってくれという話がある。

## 5 その他

### (1)次回開催日

- ・次回は校長先生を呼んで開催する。
- ・7月開催で日程調整を行う。

(16:50)